

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F
TEL/FAX: 092-260-3989
E-mail: jimmu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク (CMN) は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.
129

特集 大学生による福島訪問レポート

CONTENTS

大学生による福島訪問レポート / ベラルーシ共和国における甲状腺がん検診のあゆみを振り返る / シンカブルのご紹介 / 2023年度通常総会のお知らせ / 支援者のお名前とメッセージ



ホームページではカラー版のチェルノブイリ通信を公開中です。

↓アクセスはこちらから



農家民宿 遊雲の里での農業体験後
(2022年9月6日 福島県二本松市太田字布沢)

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を支援して下さっている皆さまへお届けしています。送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。また団体ウェブサイトでもPDFファイルにてご覧いただけます。
<https://cher9.org/information/news/>

郵便振替口座 01770-1-65328
他の金融機関からは 一七九支店 (当) 65328
楽天銀行 ジャズ支店 (支店番号201) (普) 7017104
住信SBIネット銀行 法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416
※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

大学生による福島訪問レポート

2022年9月3日～9月8日の6日間、
チエルノブイリ医療支援ネットワークのスタッ
フが福島を訪問し、3日～6日には大学生4人
も同行しました。本号では、大学生が特に印象
深かったことをテーマに報告させていただきます。

◆ 今回の訪問で訪れた場所

① 浪江町

*道の駅「なみえ」

*震災遺構浪江町立請戸小学校

② 双葉町

*東日本大震災・原子力災害伝承館

*双葉駅

③ 富岡町

*富岡漁港

④ 飯館村

*伊藤延由さん

*道の駅までい館

⑤ 二本松市

*獨協医科大学国際疫学研究室福島分室



④飯館村の村歌の歌詞が書かれた歌碑



①道の駅「なみえ」



③富岡漁港で福島第二原発を見る大学生



◆ あじさいの会（田中 大学三年）

福島訪問二日目には、甲状腺がん支援グループ・あじさいの会の事務局長をされている千葉さんにお話を伺いました。

あじさいの会は、小児甲状腺がん患者と家族、支援者による支援グループです。甲状腺がん患者が少しでもより良い治療を受け、より良い生活を送れるよう、お互いに情報共有しながら、支え合っています。（あじさいの会ホームページより一部引用）

甲状腺がん患者の方々の思い、原発事故をめぐる現状やその状況への疑問などをお話していただきました。



▲あじさいの会事務局長の千葉さんと

◇ 患者の方々の思い

甲状腺がんの患者の方の中には、「甲状腺がんになった」と言うと差別されるのではないかという不安や、過剰診断という声も上がっている中では甲状腺検査や被ばくについての話題を出すことができないという思いから、長い間誰にも話せず苦しかったという思いをかかえていらつしやる方もいるそうです。同年代の方ができることが甲状腺がんを患った事によりできなくなってしまう辛さなどを抱えた方のお話などもありました。私自身日ごろの悩みは周りに話すことで心が軽くなることもあります。が、がんという、人生に関わる問題について誰にも言えないというのは、考えただけで胸が苦しく、当事者の方々はどれだけのつらさを抱えていらつしやるのだろうかとやるせなく感じました。

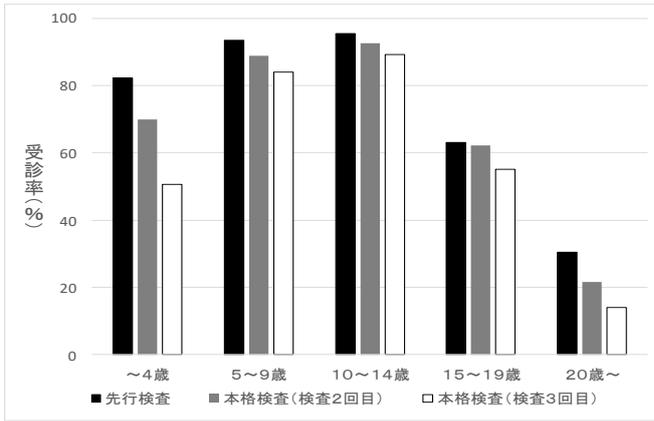
また、甲状腺を全摘出した方がされるアイソトープ治療という治療についても教えていただきました。甲状腺がんは肺に転移することが多く、肺に転移しても肺がんではなく甲状腺がんが増殖するそうです。そのため、あえて放射性ヨウ素のカプセルを飲むことでがん細胞を破壊するという治療を行います。体内に放射線物質を取り込んでいるため、ヨウ素が半減期を迎え

るまで鉛の部屋に隔離されます。また、患者さんが使用したティッシュや衣服はすべて15cmの厚さの鉛でできたゴミ箱に入れ、病室内に持ち込んだものはすべて病室において来なければなりません。実際の病室の写真を少し見せていただいたのですが、鉛のゴミ箱や病室全体が無機質で非常に重苦しく、一人で何日も過ごすなければならぬと想像するだけで非常に辛い治療であることが分かりました。

◇ 福島県の現状

福島県では、県が18歳以下の子供たちなどを対象に甲状腺検査を行っています。小中学生は学校検診で行われているため受診率が89.2%と高いのですが、自主検査となる高校生は52.7%に受診率が下がるそうです。また、学校などでの検査を行わなくてもいいのはいかという意見も出ているようですが、教育の現場からは「検査をすることで子供たちが安心して日常を送ることができる」という声も上がっているそうです。様々な立場や意見があることも理解できますが、なるべく多くの現場の方の意見が取り入れられた形で、県民の方々の安全と安心を守る制度であってほしいと思いました。

今回は、当事者の方々の思いに加え、政府や国際的な動きなども含めた、前回の訪問の際とも少し違った目線でのお話を聞かせていただきました。教えていただかなければ知らなかったことばかりで、特に普段地理的に遠くで暮らしている私たちは、積極的に知ろうと自分から調べるなどアンテナを立てていないと、県民の方々の思いはもちろん、原発を巡って何が起きているのかについてほんの少しの表面しか知ることができないと痛感しました。私は福島に訪



▲年代別の甲状腺検査受診率

福島県「第14回甲状腺検査評価部会 資料4」
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/365873.pdf>、p.3よりスタッフが作成

問するのが今回で三回目でしたが、当然ですがまだまだ知らないことばかりなので、福島のとや九州にあるものも含めて原発のことについて今後も継続的に勉強していきたいと思いません。

◆ 請戸小学校・双葉駅(内田 大学三年)



▲請戸小学校校舎

校舎に近づくと、津波の高さをより実感します

私は2021年秋に続いて二回目の福島訪問となりました。

昨年はまだ道路脇にフレコンバッグが積み残していましたが、今回はほぼ目にすることはありませんでした。中間貯蔵施設に運びこまれており、少しずつ前進しているのだなと思える一方、最終処分の方法は未だ決まっていないため、解決しなければならぬ課題はまだまだ

くさん残されているのだなとも感じました。前回は見聞きするもの全てに衝撃を受け、正直なところ受け止めきれないものもありました。しかし、今回は見聞きするだけでなく、その場で自分の考えや思いに気づくこともできたような気がしています。そこで私は風景や町並みを見て感じたことを報告したいと思います。

◇ 請戸小学校

チエルノブイリ通信127号の2022年春の訪問レポートにて、建物の説明は書かれているので気になる方はご参照ください。

震災当時、私も小学生だったので、気付けば自分の記憶と重ね合わせながら見学していました。請戸小学校でも同じように学び、遊び、時には先生に怒られたりするような学校生活があったはず。その日、私は母の作った夕飯を食べて、温かいお風呂に入って布団で寝られました。ここではその日常が奪われたのだと思ひ、言葉を失いました。



▲双葉駅



▲産業交流センターの屋上からの景色
復興祈念公園の建設が計画されています



▲教室

室内には何も残っておらず、窓の外も更地です



◀双葉駅西側に建築中の住宅

出典 双葉町「双葉駅西側地区 再生賃貸住宅・公営住宅プロジェクト 現在の現地の様子 8月号」 (https://restart-futaba.com/wp-content/uploads/2022/09/new_s_8%E6%9C%88%E5%88%86_2022.pdf) 現在の現地の様子 8月号

今はこうして更地になっている沿岸部ですが、復興祈念公園の建設が検討されていたり、農地的な利用や企業誘致が検討されているようです。新たな土地利用で活気が戻ってくるというかなと思います。その反面、本当に必要なものなのか、本当に困っている場所や人に支援は行き届いているのか、お金の使い所を間違っ

てほ
請戸小学校の2階の窓から外を見ると、さえないものが全くなく遠くの山まで見通せました。目の前に広大な平野が広がっていました。しばらくの間、窓から外を眺めながら呆然と立ち尽くしていたと思います。良く言えば、見晴らしの良い景色かもしれません。しかし、住宅が撤去され更地になり、水田は手つかずのままになっている風景はなんだか取り残されたようで寂しい気持ちになりました。
浪江町は津波被災地である沿岸部を災害危険区域（6ページに説明あり）に設定しており、請戸地区もそのうちの1つです。災害危険区域には寝泊まりをとまなう住宅・施設は建てることとができません。この地域にあったコミュニティは失われてしまっています。私たちのような見学者のほかは漁業関係者や作業員の出入りしかありません。



▲双葉駅周辺
静まりました

しくはないですね。
◇ 双葉駅周辺
8月30日に町の特定復興再生拠点区域の避難指示が解除された双葉町。駅西側の公営住宅には10月1日から入居が始まっています。私たちが訪れたのは9月3日、ちょうど住民の帰還と前後する時期でした。
17時の双葉駅には私たちの足音だけが響き渡りました。まだ人の暮らす音、匂い、気配が全然ありませんでした。子どもたちの笑い声、犬の鳴き声、車の音など、聞こえるはずの音がなくて静かすぎて、なんだかそわそわしてしまいました。2020年に開業した駅はすごく綺麗で、駅周辺に建てられていた公営住宅もおしゃれな外見でした。建物ばかりが立派でなかだか浮いてしまっている、やはり人が住んで利用してこそその建物だなと感じました。

震災や原発事故は住民から住んでいた場所だけでなく、その土地の文化や風景までも奪ってしまったのだなと思いました。文化や風景は時間をかけて形作られるものであり、やはりお金をかけてもそれは簡単には戻ってこないものです。町に人々が帰ってきて、人々の声や生活音の聞こえる、活気あふれる町が戻りますように。そうしてつくられていく新たな文化や風景の中に、どこか懐かしさを感じられるような町になりますように。



▲相馬妙見初発神社
福島第一原発に最も近い神社です

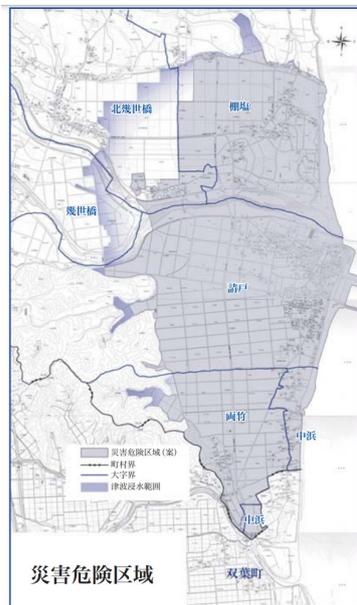


▲双葉駅前の
モニタリングポスト

☑災害危険区域とは・・・

「東日本大震災と同様の津波が発生した場合、浸水被害を受ける可能性が高い区域を基本として住居等の建築物の制限を行い、住民の生命を守り、財産の損失を軽減するために設定する区域」です(浪江町「災害危険区域の指定」より引用)。浪江町では、東日本大震災の津波による被害が著しかった沿岸部の5地区をこの災害危険区域に指定しています(左図)。

制限される建築物は住宅やホテル、医療施設などの宿泊を伴うものです。



(参考、図の出典 浪江町「災害危険区域の指定」<https://www.town.name.fukushima.jp/sosniki/26/20140430-0.html>)

☑浪江町移転元地活用方針

災害危険区域に指定した5つの地区のうち約121.6haを移転促進区域に指定、そのうち約62.6haは各種復旧・復興事業用地として活用しています。

● 海岸防災林

高潮などの災害防止機能や津波被害防止機能も含めた「多機能海岸防災林」

● 復興祈念公園

震災の犠牲者への追悼と鎮魂、記憶と教訓の伝承、復興に対する強い意志の発信

などが計画されています。



(参考、図の出典 浪江町「浪江町防災集団移転元地活用方針」https://www.town.name.fukushima.jp/uploaded/life/29928_112419_misc.pdf)

◆ 伊藤延由さん(平江 大学三年)

福島県飯館村在住の伊藤さんに、飯館村を案内していただきながらお話を伺った。私は今回が初めての福島訪問であった。飯館村で一番印象に残っているのは、人目につかないような場所に積まっていた、巨大な黒い「フレコンバッグ」の山である。



▲飯館村に置かれているフレコンバッグ
丸で囲まれているあたりにたくさん置かれていました

「フレコンバッグ」というのは、除染に伴い発生した廃棄物をフレコンバッグと呼ばれる保管袋に詰めたものごとである。環境省は2022年3月末で大半は中間貯蔵施設に運び込んだと会見で述べた。飯館村以外の自治体は搬入が進んでいるが、飯館村は遅れていて、現在も搬入が進んでいる。実際飯館村を移動する間に、フレコンバッグを詰んだトラックと何台かすれ違っていることから、震災か

ら十一年経った今も尚、除染作業が難航しているように感じた。環境省は2045年までに、県外の最終処分場に移すことを法律で定めているが、受け入れ先は未定である。しかし、伊藤さんによれば、核物質は元々「閉じ込める」ことが原則であり、福島県外に出すべきではないという。実際、環境省の計画とは裏腹に、福島県外の人々の除去土壌等への関心や認知度は低く、前提知識の共有が十分ではない中で、県外での受け入れは難しいと思われる。人気のない場所に大量に積まれた黒いフレコンバッグの異様な光景をメディアが取り上げることもなければ、帰還困難区域になれば尚更現



▲伊藤さん(右)の説明を聞くスタッフと大学生



◀帰還困難区域前の看板

状を把握することは難しい。情報が共有すらされていない現実には、国の責任を果たす積極的姿勢は見られない。

では、現在の飯館村の状況はどうなっているのか。震災前のような生活に戻っているとは言いがたい。健康面から見ると、飯館村では現在1箇所の医療施設が開設、再開している。しかし伊藤さんの話によれば、診療が行われているのは、毎週火曜日と木曜日の午前中、内科と外科のみだそう。飯館村に限らず、福島県全体で高齢者の割合は増加している。当然、医療機関の受診が必要となる高齢者もいるはずだが、現状限定的な医療体制になっており、不便と言わざるを得ない。



▶飯館村内のキャンプ場にて

周りは木に囲まれており、地面近くでは少し高めの線量も計測されました
(0.558 μSv/h)

そもそも放射線の被害を受けた飯館村に対して、国は健康と安全を確保出来ていると言えるのだろうか。環境省によれば、1年間に受ける日本人の平均被曝線量は5.98ミリシーベルトへ自然放射線2.1(フロン・トリトン)0.48、食品0.99、宇宙0.30、大地0.33)、医療被曝3.87(出典 環境省「放射線による健康影響等に関する統一した基礎資料」)である。しかし、伊藤さんによると、福島県では約3倍の20ミリシーベルトにも上るといふ。国やメディアで発表されているような、世間で認知されている値よりも高い数値ではないのだろうか。実際に線量計を持ちながら飯



▶ 帰還困難区域前のモニタリングポスト
(0.979 $\mu\text{Sv/h}$)

震災以前は0.05 $\mu\text{Sv/h}$ だったそうですが、震災直後の1 $\mu\text{Sv/h}$ と比べて「下がった」と感じてしまうそうです

館村を周り、自分の目で確かめた経験から、線量はもちろん福島の実況に対する世間の体感イメージと実数値に差があると感じた。しかし、住民は線量が高いことをわかっていながらも、長年その場身を置くことで、感覚にズレが生じ、一般の線量より高いその環境を新たな「普通」として体が慣れてしまっている。このようなら感覚の麻痺は我々も日々の生活で実際体験している。新型コロナウイルス拡大初期は騒いでいた人々も、今となっては新規感染者数が更新されようと危機感を持ちづらくなっている。人々を混乱に陥れた新型コロナウイルスも今となつては、感染することが「普通」になつてきている。

被曝量が増えれば、癌だけでなく免疫低下も引き起こす可能性が高い。そのような危険性がある中、国は急ぎ足で住民の帰還を促しているように見える。実際、帰還を促すために、飯館村で開校された新学校は、認定こども園と小中学校を集約し、子供の教材費や給食費、制服・運動着の購入費、遠足・修学旅行の参加費などを無料にしているそうだ。子どもの健康上の安全を確保できるとは言いがたく、まだ成長途中である子ども達を未だ平均値より高い線量下の元で教育するべきなのだろうか。国の帰還率を上昇させるための姿勢に対

して、本当に以前のような生活を約束出来るのだろうか。福島第一原発事故発生後、当時の枝野幸男官房長官が「直ちに人体や健康に影響を及ぼす数値ではない」と記者会見で繰り返していたのを覚えていたのだろうか。被曝してすぐ健康に影響が出ないのは事実である。だから直ちに影響がないというのは、長期的に見ると、将来影響がでけると言っているのに等しい。

「このような言動からも、国に必要なのは長期的な支援である。すぐ役立つ知識が役に立たないように、すぐに解決できるような表面的な方法は根本的解決に繋がらない。自治体、ましてや個人で解決することが難しい問題に、国が長期的に寄り添えるかどうかにかかっていると見えるだろう。そのためにも、国民の一人一人が福島の実況を把握し、国に責任を問い続けていくことが必要であるのではないだろうか。」



▲ 飯館村内の認定こども園 (上)
と小・中学校校舎 (下)

●宿の紹介・感想

今回の訪問中、私たちを温かく迎えてくださった方々を大学生の感想とともにご紹介いたします。

◇ 渡邊さん（飯館村）

飯館村で「いいたて雪つ娘^{ゆきつこ}」というかぼちゃの生産や加工、販売などをしていらっしやいます。

訪問初日に一泊させていただき、夕食と翌日の朝食をご馳走になりました。大テーブルをみんなで囲む食事は、一人暮らしの私には久しぶりでなんだか懐かしい気持ちになりました。

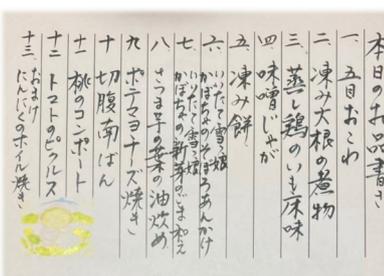
震災や原発事故で飯館村が全村避難になってから今に至るまでのお話を聞いていると苦労の連続だったことが分かりました。精力的に活動しているとメディアに取り上げられることもあります。コメントや映像が都合よく切り取られて、渡邊さんの想いとは違ったように伝わってしまうこともあります。地元でも心無い言葉を投げかけられることもあるそうです。それでも笑顔で前を向いて頑張る「かーちゃん」は一

本筋が通っていて本当に素敵なお方だなと思いました。旦那さんに「頑張ってること、俺は分かっている」というような言葉をかけてもらったのが嬉しかったとお話していたのが印象的でした。本気や努力はいつも近くで見えてくれる人にはちゃんと伝わるものです。反対に、一瞬だけを切り取って分かった気になるのはとても失礼なことだと思いました。

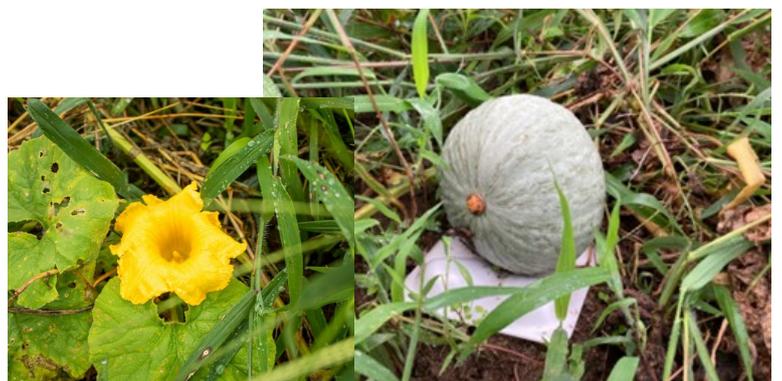
いただいたお料理は「いいたて雪つ娘」かぼちゃを使った郷土食でした。「いいたて雪つ娘」はその名の通り、白い皮が特徴的です。ふわふわ溶けていくような感じで口いっぱい甘みが広がりました。渡邊さんの「までい」な料理はたくさん食べても全然胃もたれしませんでした。私もこんなに優しくてあたたかい料理を作れる人になりたいなあ…

（内田）

*「までい」とは、福島の方言で、「丁寧に、心を込めて」という意味



▲いただいた夕食



▲いいたて雪つ娘
畑も見せていただきました

◇ 農家民宿 遊雲の里（二本松市）

山、田んぼ、畑など広大な自然に囲まれた農家民宿です。春は種まきや田植え、夏は野菜の収穫、秋の稲刈りなど季節ごとに様々な農業体験ができたり、旬の野菜をいただけます。

.....

遊雲の里には5日にお邪魔しました。室内に入ると、既に夕飯の準備をしてくださっており、机の上には福島県の食材を使った色とりどりの野菜が沢山ありました。ご飯を食べることが大好きな私は、お箸に手をつけるまで、我慢するのに必死でした。

ご飯を食べる前には菅野さんから福島の実状についてお話を聞きました。未だ風評被害の影響から、福島県で採れた食材に対して心無い事を言う人もいれば、やはり食べようとする人もいるということでした。風評被害を克服するには、実際に食べてもらうことが一番です。作っていたいただいた料理全てが美味しく、食べようとしなないのはもったいないと思いました。茄子にじやがいも、トマトやリンゴ。この他にも、豊かな食材が育てられている自然豊かな土地の料理をぜひ皆さんにも味にわっていただきたいです。ちなみに出されたお料理はもちろん完食い

たしました。本当にご馳走様でした。

ご飯のことばかり話しましたが、この遊雲の里では野菜の収穫体験もできます。私たちもミニトマトとピーマンの収穫体験をさせていただきました。都会に住み慣れた人々にとっては、普段得ることのできない体験になるのではないのでしょうか。短い時間ではありましたが、素敵な思い出を提供してくださった遊雲の里のご夫婦に改めて感謝したいです。

（平江）

福島でご飯をいただく際は、収穫についてのお話や、自家製の味噌で味付けしたなど、畑と食卓のつながりが見えるお話もたくさん伺います。どの料理も真心を感じられ、お話を聞いてからだより一層おいしく感じます。優しい味ばかりで、たくさんの料理も気づいたら完食しています。本当にごちそうさまでした。

また、遊雲の里のすぐ近くには、日本百名山の一つである安達太良山あだたらやまときれいな夜空が見える小高いところがあります。今回は曇っていて星が見えず、安達太良山も見えませんが、福岡市ではめったに触れられない大自然を感じられる場所で、美味しいご飯やお話とともに思い出になります。

（田中）



▲収穫体験のミニトマトとパプリカ



▲畑と山を眺める大学生

ベラルーシ共和国における 甲状腺がん検診のあゆみを振り返る

日本医科大学付属病院 病理部 渡會泰彦

◆はじめに◆

私は臨床検査技師として2003年にブレスト州における第3回検診に初めて参加しました。チェルノブイリ原発事故のことは当時放射能が日本に飛んでくると心配されたことなど報道で知っておりましたがベラルーシという国名も初めて聞くくらい知識が全くない中の訪問でした。

フランクフルト経由で大きな支援物質の山をカートに詰め込み長旅を終えて現地に到着しました。

空港の照明は暗く無駄なエネルギーを使わないという日本では気が付かないことがベラルーシでは当たり前になっているのだと気が付きました。現地ではアントンロマノフスキー赤十字総裁はじめ赤十字のメンバーに出迎えいただき

ました。空港の中まで総裁が迎えにきてくださったため入国審査なしで入国できてしまいました。

改めてチェル支援運動の皆様と国の機関である赤十字のつながりの深さを認識した次第です、総裁はこの後ブレストの検診にも同行され検診の様子をご覧になれば夜も懇親会で親しく交流することができました。

街は非常に整然としており、ところどころに花が植えられている美しい街並みでした。人々は週末にはオペラやバレエを楽しみ、子供達にはサーカスと特に若い世代が多く子供たちの元気な姿が印象的で若く活力的な国の印象でしたので原発事故に長年苦しめられた国の影を感じることはありませんでした。

しかし検診にこられる子供たちや青年や検診以外でも甲状腺に異常がある子供さんを病院で見かけることなどから放射線の影響がまだ続いていることを再認識しました。



◆ 細胞診検査について ◆

私は臨床検査技師の中でも細胞診検査を専門にしており、指導しながら現地の移動検診で精密検査が必要とされた住民の甲状腺の細胞診検査を行うことが私に与えられた任務でした。

細胞診検査は甲状腺にできたしこりに医師が注射で使用する細い注射針を刺して細胞を吸引して検査するもので、試薬で細胞に色を付けて



▶ ベラルーシでの検診の様子

がん細胞を顕微鏡で探して診断する仕事です。

検査のためのアルコールや試薬類も現地では高額で品質の良いものを入手することができないことを先に参加された臨床検査技師さんから情報を得ておりましたので(株)武藤化学さんの全面協力を得て必要な試薬やスライドガラスは日本から持ち込むことにしました。

我々の帰国後も現地に使えるようにたくさん試薬類とスライドガラスを支援することができました。

◆ ベラルーシ共和国における甲状腺癌検診について ◆

ベラルーシ共和国では甲状腺癌が小児では事故後に72.6倍(事故前11年は7例、事故後11年では508例)に急増しました。表1参照

しかも被曝後10年近くの潜伏期を置いて増加するとみられていた甲状腺癌が4年目から増加しはじめ6年後の1992年にはベラルーシ国内における小児甲状腺癌の増加が報告されています。(文献等1)

事故後4年後に1.2人/10万人、9年後には4人/10万人を記録しその後減少に向い16年後の2002年にはベースに戻っています。

しかし、1995年よりは代わって青年期の甲状腺癌が急増し、これからのベラルーシを担っていく若者の罹患は新たな社会問題となっています。

私たちはベラルーシ国民を救うべく1997年から現地の医師らと協力し甲状腺癌の検診を行っていたNPO団体チェルノブイリ医療支援ネットワークの招請により、2003年より計10回の検診に参加し、現地の被曝住民に対する細胞診を用いた甲状腺癌検診と細胞診の技術指導を行ってきましたので、その意義や成果につき報告します。

*検診場所となったブレスト州は、当時各国の支援が行き届かない“支援過疎地”であった地域になります。

◆ 検診の目的 ◆

第一段階…一人でも多くの住民の甲状腺癌を発見すること

検診技術が未熟であった現地でデモンストレーション的な検診を行い、1人でも多くの癌を発見することを目的とした段階。

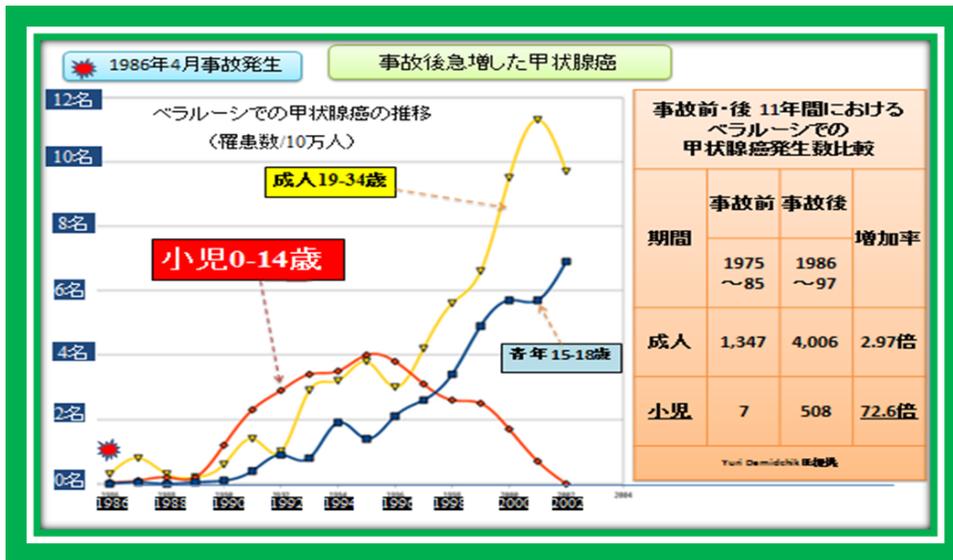


表 - 1 10万人当たりのベラルーシの甲状腺癌年齢と経時変化

第二段階…現地医師による検診の実現へ

① 検診手技等の伝達

現地医師と共に検診を行うことにより、触診、超音波検査、穿刺吸引細胞診それぞれの検診手技を伝達することにより、現地医師による検診の実現を目的とした段階。

② 細胞診断技術の伝達

現地医師が自ら患者から採取された細胞を診断できるまでの支援

第三段階…新しい甲状腺手術手技の伝承

特に女性に多い疾患であり、大きく頸に傷を残す現地施行の手術による患者の心の負担を解消すべく頸に傷跡がほとんど残らない内視鏡手術技術（VANS法）の伝承を目的とした段階。

* 解説…甲状腺内視鏡手術

Video-assisted Neck Surgery (VANS) 法手術

1998年に清水教授が開発した内視鏡手術方法本術式は、甲状腺疾患は女性に多く、常に露出される前頸部に手術創が入る甲状腺・副甲状腺手術において美容的のみならず確実性のある方法で、切開創は露出された前頸部におかず、開襟衣類で被える前胸壁におく。

◆ 支援の成果 ◆

* 第一段階は10年継続し行い、第二段階の①は2-3年で現地医師は日本の医師を凌ぐ完璧な手技を身につけることができました。

第二段階の②である細胞診技術の伝達につきましては、現地滞在時間の制約などから最後まで実現が困難でした。

診断技術の伝達には診断の手本となる教科書アトラス（写真集）が不可欠であることを検診の中で実感していましたが、ロシア語の教科書は存在しませんでした。

そこで医療通訳の山田英雄さんを中心に多くの方々の協力により1年半の歳月をかけ日本語の「メイ・ギムザ染色による甲状腺の細胞診」越川卓先生著、1991年武藤化学のロシア語訳が行われ、ついに2012年の検診の際によりやく贈呈することができました。

この教科書は現地医師が基礎的な診断技術を学びながら甲状腺がん細胞の写真集と見比べながら実際の患者さんの診断に役立てることができきる内容となっております。

この本は世界で一つの貴重な本ですので、今後はベラルーシのみならず、広いロシア語圏内の検診の参考書として広めることができたら良いと考えております。

第三段階の手術は現地で器具を作製し、現地医師自ら執刀できるようにまで伝達ができております。

ベラルーシ甲状腺がん検診 10年の結果											
年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	計
不適正	13	5	1	0	0	0	1	0	1	1	22 (5%)
正常/ 良性	48	14	21	35	29	33	20	40	25	21	286 (69%)
鑑別 困難	16	2	7	8	3	12	5	9	2	2	66 (16%)
悪性/ 悪性疑	8	3	2	7	6	7	3	1	3	2	42 (10%)
計	85	24	31	50	38	52	29	50	31	26	416

◆ チェルノブイリ原発事故30周年
国際会議での発表 ◆

事故から30周年の国際会議が2016年4月21日～22日にベラルーシ共和国ゴメリの放射線医学環境センターにて開催されました。(ゴメリは高濃度汚染地域です)

その中でNPOの活動に事故後早くから参加し、細胞診の検診を行ってきた当院の名誉教授(前内分泌外科教授)である清水一雄先生がエコー・細胞診の検診から内視鏡手術の普及までを発表され、会場からは賞賛の拍手が沸き起りました。

特に胎内被曝の影響で発症した甲状腺癌が我々の検診で見つかり、日本で内視鏡手術した



▶ (上) 日本で内視鏡手術後
(下) 20歳の胎内被曝患者検診時のエコー検査

当時20歳の患者さんが今はお母さんになり元気で過ごしている紹介した場面では拍手が鳴り止みませんでした。

我々の地道な未来につながる支援活動が現地の人々に認められた嬉しい体験でした。

◆ 検診の結果 ◆

2003～2012年の10年間の検診で計416名の穿刺吸引細胞診が行われ、その内42名(約10%)の住民に甲状腺癌が発見され現地の医療機関で適切な治療を受けることができっております。

◆ まとめ ◆

原子爆弾と原子力発電所の違いはあれ、同じ被爆国としての思いから支援を続けてきましたが、チェルノブイリ原発事故から25年経た2011年に日本が原子力発電所事故で汚染されようとは私も含め誰も想像していなかったことと思います。

ベラルーシでは今も被曝の影響が残りながらも、放射線からいかに自分を守るかを心得て実行し皆元気に前向きに暮らしておりますので、

日本でも同じことが言えると思います。

今後の支援につきまして、まだ課題が多く残っている第二段階の②である細胞診技術の伝達につき進めていきたいと考えております。

2016年1月にはモニター付きの顕微鏡写真撮影装置を贈呈できましたので、今までは顕微鏡を見ている一人しか見ることができなかった細胞を複数のスタッフが同時に見ることができ、これを活用し、今まで検診で発見され手術された症例の顕微鏡写真を手術された甲状腺組織と照らし合わせながらデイスカッションしていく中で、診断技術を向上させる取り組みを紹介し、現地医師間で検討会を開催できるように指導していくことも考えております。

ベラルーシとウクライナはともに原発事故で長い間放射線の影響と戦ってきました。

現在厳しい世界情勢となっておりますが、原発から放射線が漏洩したら同じことの繰り返しになり今までの両国の努力が水泡に帰することになりますので、一日も早く平和で安全な世界に戻れることを祈ります。



クレジットカード決済
シンカブルのご案内



クレジットカードで寄付ができる
“Syncable(シンカブル)”を導入しています。

チェルノブイリ医療支援ネットワークのホームページや右のQRコードからアクセスが可能です。



お手持ちの端末でお読み取りください

チェルノブイリ支援 コーヒー・紅茶・ハーブティー 年末年始期間中の商品発送のご案内

年内発送 最終受付 : 2022年12月26日(月)

年内最終発送 : 2022年12月28日(水)

2022年12月27日以降のご注文につきましては
2023年1月6日より順次発送させていただきます。



◇ お知らせ ◇ 2023年度通常総会を開催します

2022年度の事業報告や決算報告等について議決をおこなう年次総会を開催します。総会の議決権を有する正会員でない方もオブザーバーとしてご参加いただけます。お気軽に事務局までお問い合わせください。

日時 2023年2月18日(土) 16:00 ~ 17:00 *予定

会場 チェルノブイリ医療支援ネットワーク事務所
(福岡市博多区博多駅東2-5-11 コスギビル5F)

*新型コロナウイルスの感染拡大状況を考慮し、場合によっては書面や電子メール等での評決を中心とした開催方式を採用します。事業報告・決算報告資料は総会後にウェブサイトにて公開予定です。

たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計 7,462,223円

- *活動支援金 322,520円
- *のぞみ21カンパ 0円
- *雪だるま3号カンパ 8,000円
- *東日本支援カンパ 73,000円
- *おまかせカンパ 62,000円
- *ウクライナカンパ 6,996,703円

(2022年8月～2022年10月分の寄付内訳)

●口座受付寄付

石川睦枝 沖佐和子 梶原孝子 久保山菜摘 佐々木悦子
佐藤久美 渋谷けい子 関根敏子 高橋武三 野村文子 引
田良子 古本募金きしゃぼん(運営:嵯峨野株式会社) 松井
岩美 森悠子

〔都道府県別〕

- 【北海道】1名 【福島県】3名 【福井県】1名
- 【石川県】1名 【新潟県】4名 【静岡県】2名
- 【愛知県】4名 【岐阜県】1名 【兵庫県】2名
- 【島根県】2名 【広島県】2名 【山口県】1名
- 【愛媛県】2名 【福岡県】11名 【佐賀県】2名
- 【熊本県】1名 【大分県】1名
- 【宮崎県】1名 【鹿児島県】2名

計 98名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリーサポーターの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井
上礼子 内野千鶴子 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久
保伸子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子
片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川
崎君子 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚
子 財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 佐々
野也依 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永
浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京
子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 富永隆史
鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ
永野沙智子 西首延子 納富育代 深川哲臣 福井初子 福
本勅子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木
幸美 松永庸子 丸山子より 水本敬子 三野桂子 宮野義
治 村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子 山中陽子 山本亮輔
吉田美抄子 渡邊久美子

計 108名(匿名含む)

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。皆
様よりお預かりしたご寄付は、チエルノブイリ被災者医療支
援、福祉工房のぞみ21支援、東日本震災被災者支援、事務
費用等にあてさせていただきます。
※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲載して
おります。

皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●今回の通信よかったです。わずかですが...●おい
しいコーヒーありがとうございます。ウクライナ戦争
早期終結を願っています。●活動の大切さを通信が
教えてくれます。ありがとうございます。●グリーン
コープ共同体での講演Q&A集P.18「日常で気を
つけること」がとても参考になりました。私方、人工透
析治療を受けています。月1回定期的に胸部レント
ゲンを撮っており、その影響を心配していました。1
回50USVとは驚きです。12.5時間の被ばく(西
日本の日常)は心配です。

お知らせとお願い

振込 用紙は原則として毎月同封
しています。これは「思い立つ
た時にいつでも振り込みできるように、毎月
同封してほしい」というご要望があったからで
す。決してお振込を強要するものではありません。
恐れ入りますが、ご不要な方は処
分をお願いいたします。

住所 を変更された方は、事務局
までお知らせください。なお
今後の資料送付がご不要の場合は、お手数
ですが、事務局までその旨ご連絡ください。

編集後記

今年もたくさんの方々のインテリゲンシアやボランティアの方々に参加していただき、にぎやかな1年となりました。CMNでの経験が今後の人生の糧となればうれしいです。(K.T)